仁左平の英雄 伊加古

今日は、仁左平小学校の全校地域探検の日です。
通称「もち坂」に着きました。
ここは、昔から「もち坂」と言われています。舗装される前は、土がもちのようにねばって歩きにくい坂だったので、そう言われているのだそうです。

（引きながら）

そのもち坂で、一平くんが、ある記念碑を見つけました。

2

一平　「もち坂」なのに、どうして「伊加古ロード」って書いてあるんだろうね？

桜　学校で伊加古集会ってやってるけど・・・。

一平　（あくびをしながら）あーあ、昨日もゲームクリアできなかったよ。

桜　私は、こっそりお布団の中でクリアしたわ。

一平　じゃあ、学校から帰ったら教えてよ。

桜　いいよ。それじゃ４時に戸花の東家でね。

（引きながら）

二人は、学校から帰ると、約束通りゲームをもって戸花団地に行きました。

一平　おそくなっちゃったね。

桜　だって、一平君が帰りの会で先生におこられるんだもん。
（少し間）
ゲーム持ってきた？

一平　もちろん。ここがクリアできないんだよなあ。最強のキャラで戦っているのに、どうしても勝てないんだよな。

桜　えっ、簡単よ。ちょっと貸して。とっておきの裏技教えてあげるね。

一平　あれっ？変だな。動かないぞ！

桜　壊れちゃったのかな？

一平　何だ、これでもだめか。

（引きながら）

と、その時です。突然、ゲームの中から見たこともない男が現れました。

伊加古　（咎めるように大声で）お前たちは、何をやっているんだ！

桜　（びっくりして）きゃー！お化け！

一平　だ、だ、だれだ、お前は！

伊加古　俺か？俺はな、今から１０００年以上前の爾薩体の酋長、伊加古だ！お前たちは、ゲームでくだらない戦いをしやがって！後で、お前たちに、本当の闘いというものを見せてやる！

6

すると、突風が吹きつけ、一平くんと桜さんは、思わず目をつぶってしまいました。

（引きながら）

目をあけると、そこには、今の生活とは違う、何か昔の風景が目の前に広がっていました。

伊加古　俺が小さかった頃は、村に争いなどはなく、あのように人々は平和に暮らしていた。

桜　あれ！胡桃を割っている。すごい。籠いっぱい。

伊加古　仁左平は、栗や胡桃などの木の実がたくさんなり、おやつにしたり、いざというときの食料にしたりしていたんだ。

桜　きれいなネックレスをしている！

伊加古　琥珀や めのう という宝石でできているんだぞ。

伊加古　ここも仁左平だ。

一平　馬に乗っている人がいる。かっこいいね。

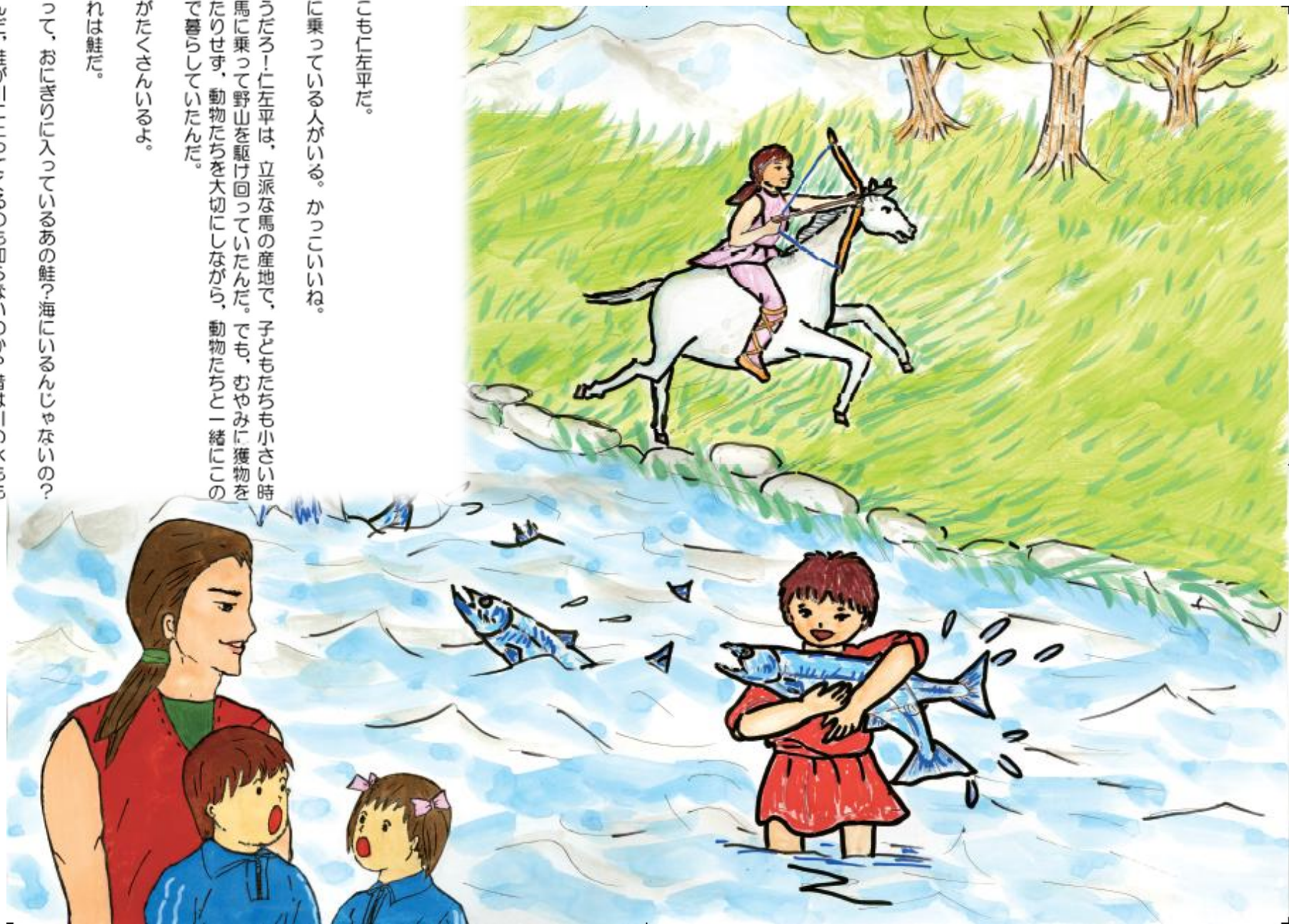
伊加古　そうだろ！仁左平は，立派な馬の産地で，子どもたちも小さい時から馬に乗って野山を駆け回っていたんだ。でも，むやみに獲物を獲ったりせず，動物たちを大切にしながら，動物たちと一緒にこの野山で暮らしていたんだ。

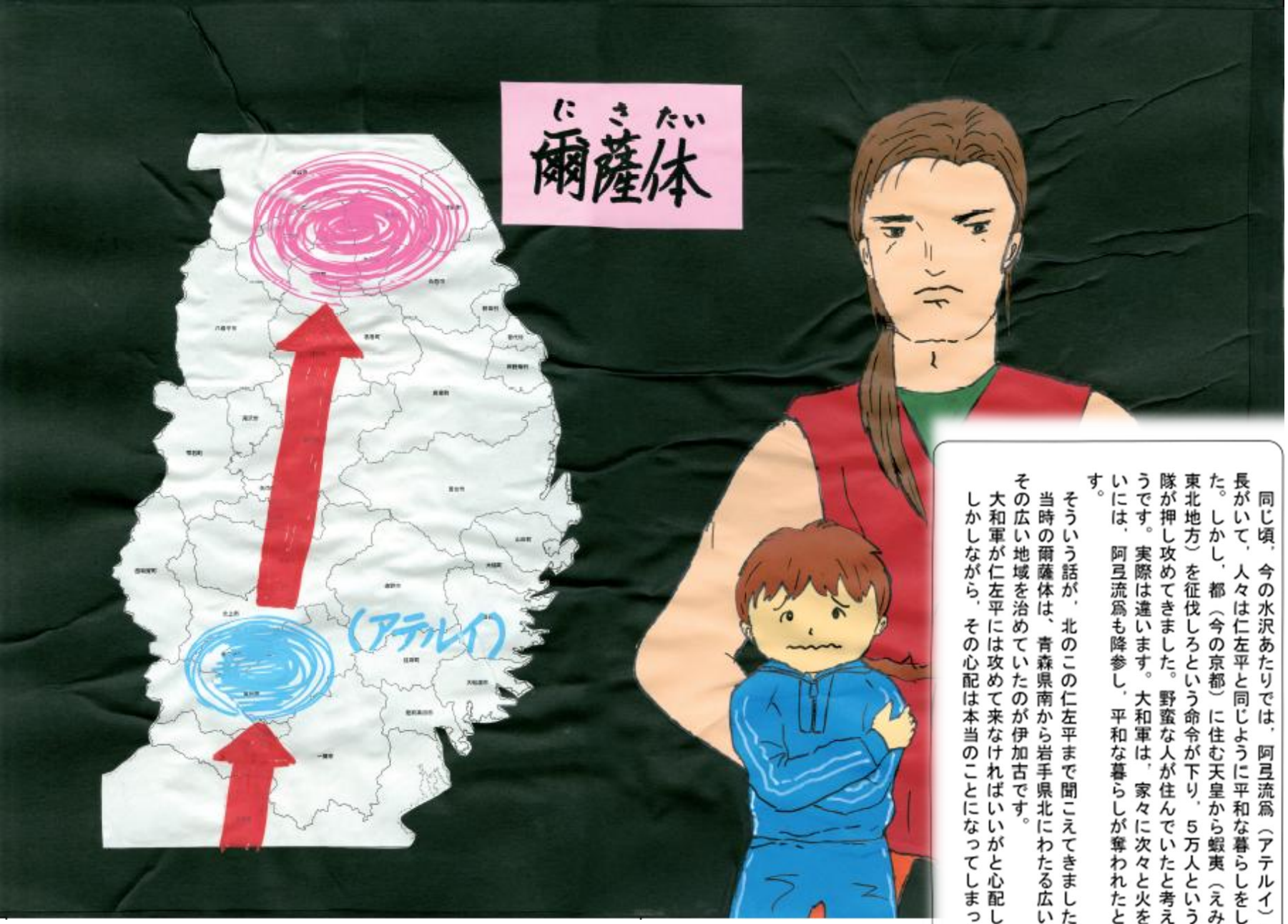
桜　魚がたくさんいるよ。

伊加古　あれは鮭だ。

一平　鮭って，おにぎりに入っているあの鮭？海にいるんじゃないの？

伊加古　なんだ，鮭が川に上ってくるのも知らないのか？昔は川の水ももっときれいで，鮭もたくさん上ってきた。人々は豊かな自然の中で平和に暮らしていたんだ。





同じ頃、今の水沢あたりでは、阿弖流爲（アテルイ）という酋長がいて、人々は仁左平と同じように平和な暮らしをしていました。しかし、都（今の京都）に住む天皇から蝦夷（えみし、今の東北地方）を征伐しろという命令が下り、５万人という大勢の兵隊が押し攻めてきました。野蛮な人が住んでいたと考えていたようです。実際は違います。大和軍は、家々に次々と火を放ち、ついには、阿弖流爲も降参し、平和な暮らしが奪われたというのです。

そういう話が、北のこの仁左平まで聞こえてきました。

当時の爾薩体は、青森県南から岩手県北にわたる広い地域で、その広い地域を治めていたのが伊加古です。

大和軍が仁左平には攻めて来なければいいがと心配しました。

しかしながら、その心配は本当のことになってしまったのです。

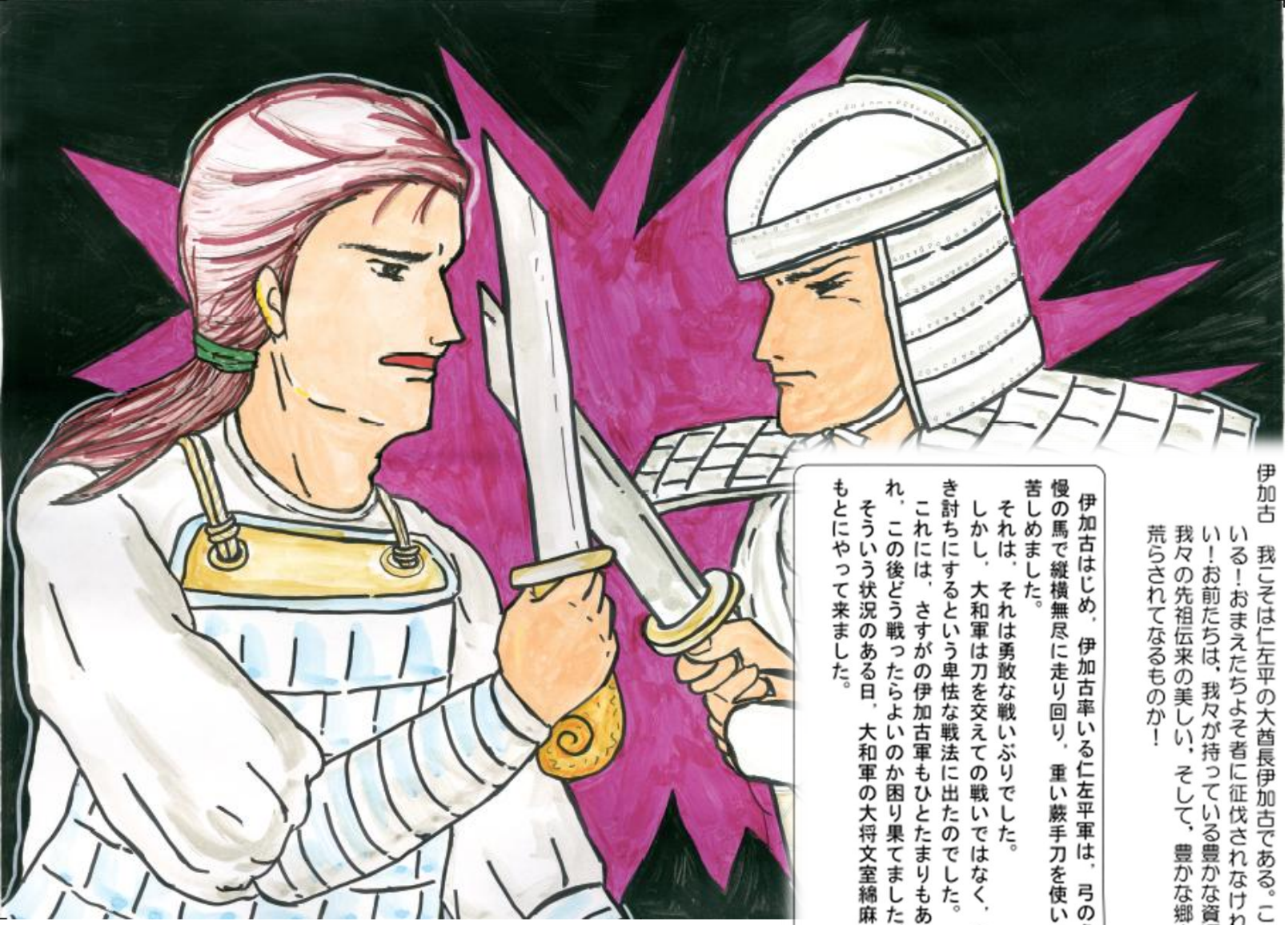
どこからともなく、次々と火の矢が放たれて家が焼かれています。子どもたちの悲鳴もあちこちから聞こえてきます。

押し寄せた大和軍は総勢２万６千。対する伊加古軍は５千。とても不利でした。それにもかかわらず、伊加古軍は強く、ほとんど互角の壮絶な戦いが繰り広げられました。

この戦いは、もちろん伊加古率いる仁左平側から仕掛けたのではありませんでした。よく走る馬、獣の毛皮、珍しい薬草、金などの仁左平の豊かな資源を奪うために大和軍が仕掛けた一方的な侵略戦争でした。

（引きながら）

そして、ついに大将同士が顔を合せました。



綿麻呂　我こそは、征夷大将軍文室綿麻呂（ふんやのわたまろ）なるぞ。嵯峨天皇の命を受け、大和に逆らうお前たち蝦夷を征伐にきた。覚悟しろ！

伊加古　我こそは仁左平の大酋長伊加古である。このあたり一帯を治めている！おまえたちよそ者に征伐されなければならない覚えはない！お前たちは、我々が持っている豊かな資源が目当てなのだろう。我々の先祖伝来の美しい、そして、豊かな郷土をお前たち侵略者に荒らされてなるものか！

伊加古はじめ、伊加古率いる仁左平軍は、弓の名手揃い。また、自慢の馬で縦横無尽に走り回り、重い蕨手刀を使いこなして、大和軍を苦しめました。

それは、それは勇敢な戦いぶりでした。

しかし、大和軍は刀を交えての戦いではなく、家々に火を放って焼き討ちにするという卑怯な戦法に出たのでした。

これには、さすがの伊加古軍もひとたまりもありません。家を焼かれ、この後どう戦ったらよいのか困り果てました。

そういう状況のある日、大和軍の大将文室綿麻呂の使者が伊加古のもとにやって来ました。

使者　これ以上戦うことは、お互いのためにもよくない。戦いをやめよう。このままだと、どんどん人が死んでいき、家も焼かれていく。・・・もし、酋長である伊加古お前の身をこちらに引き渡すならば、我々は、もう家に火を放ったりはしないし、人々を殺したりはしない。どうだ?!

伊加古は、考えました。悪いのはこちらではない。侵略してきた大和が悪いのだ。しかし、これ以上人々を死なせたくない。苦しめたくない。郷土を荒らされたくない。断れば、大和の放火も続く。どうすればよいのだ。うーん・・・。

しかたない！相手の言う通りにしよう。

伊加古　わかった。私が行けばよいのだな！

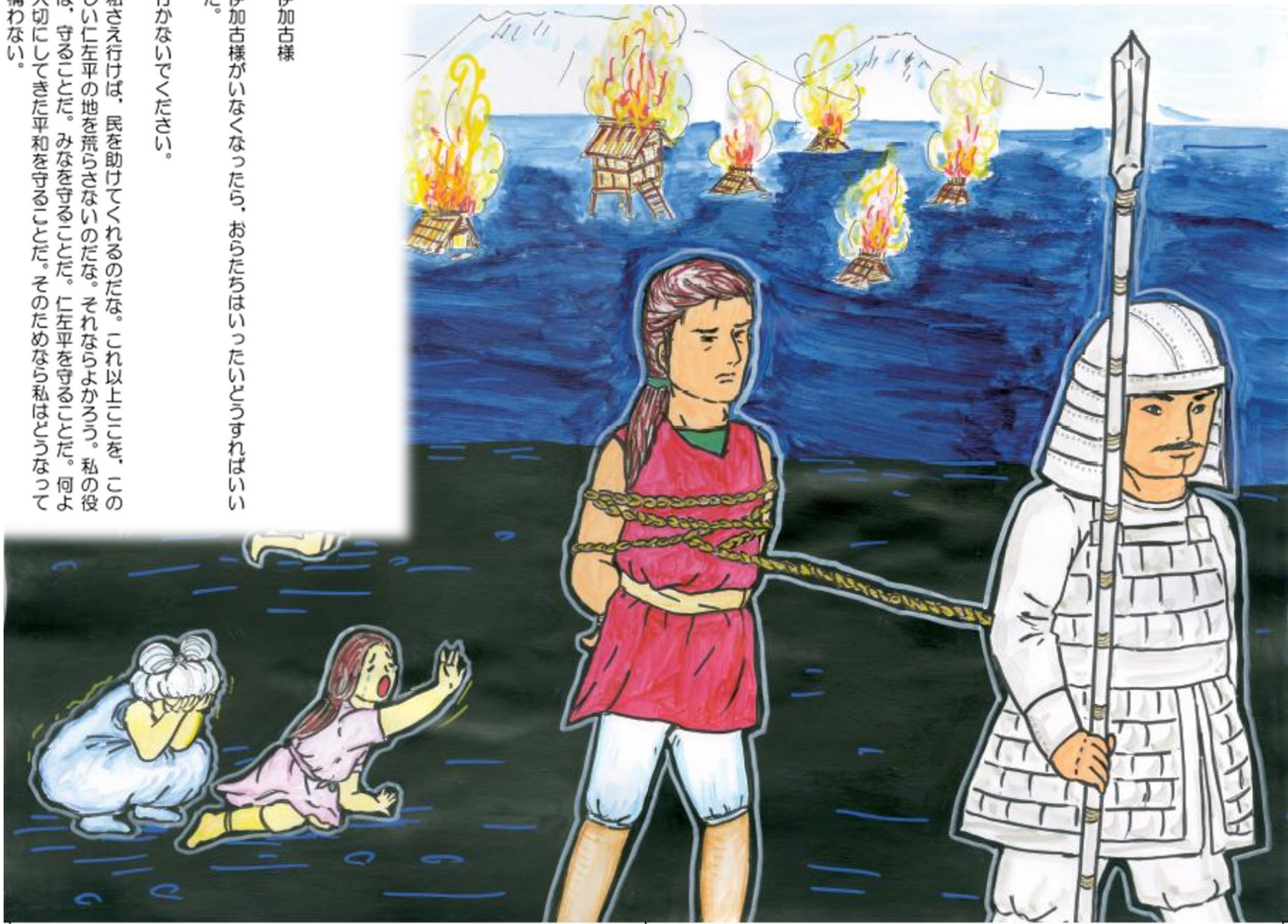
村人1　伊加古様

村人2　伊加古様がいなくなったら、おらたちはいったいどうすればいいんだ。

村人3　行かないでください。

伊加古　私さえ行けば、民を助けてくれるのだな。これ以上ここを、この美しい仁左平の地を荒らさないのだな。それならよかろう。私の役割は、守ることだ。みなを守ることだ。仁左平を守ることだ。何より大切にしてきた平和を守ることだ。そのためなら私はどうなっても構わない。

民衆　（口々に）伊加古様。伊加古様。行かないでください。行かないでください。



伊加古は、決断しました。すっと立ち上がり、追いすがる民に「俺は大丈夫だ。達者で暮らし、仁左平を守ってくれ。」とだけ言って、使者とともに歩いて行きました。振り返ることもありませんでした。

全てを守ろうとした伊加古。その姿は、正に勇者。勇敢で潔い大酋長を民衆は泣き崩れながら見送るしかありませんでした。その後、伊加古を見たものは一人もいませんでした。

その時です。
急に当たりが明るくなり、一平くんと桜さんは、前のように戸花団地の東家に座っていました。
目の前には、伊加古が立っていました。

伊加古　俺は、この美しい郷土を守るために闘った。しかし、豊かな我が郷土も闘いで火を放たれ、一瞬にして荒らされてしまった。俺もできれば闘いたくはなかった。我々は、縄文時代の昔から、食べるために獲物や木の実などをとり過ぎないこと、自然を大切にして自然と共に生きること、そして、自分たちの領土を広げるために他の村の人と争うようなことはしないことを心に誓って生きてきた。そのことで、この豊かで美しい郷土を守り、仲良く平和な世界を築き上げてきた。その平和な暮らしが望まない戦いによって壊されてしまったのが悔しくて仕方ない。

（引きながら）

と、次の瞬間、突風が吹き、風と共に伊加古の姿も見えなくなってしまいました。

一平　あの闘いすごかったね。

桜　怖かった。私たちぐらいの子どもたちも闘いに巻き込まれ、泣きじゃくっていたね。

一平　僕たち、伊加古大酋長の子孫かもしれないね。

桜　そうだったらすごいことだね。

一平　伊加古さんが教えてくれたことを大事にしていかなければならないね。

桜　みんなにつたえていきたいね。

私たちの古里、仁左平には、こんな勇敢で偉大な「伊加古」という英雄がいたのです。